

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公開します。

会 議 名	令和元年度第2回高松市生涯学習センター等運営協議会
開 催 日 時	令和元年11月15日（金）午前10時～11時45分
開 催 場 所	高松市生涯学習センター2階 小研修室
議 題	(1) 令和元年度高松市生涯学習センター主催事業（上半期分）について (2) 令和2年度高松市生涯学習センター主催事業（案）について
公 開 の 区 分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上 記 理 由	
出 席 委 員	6人 武重会長、上原委員、阿部委員、岩本委員、川上委員、徳増委員
傍 聴 者	0人（定員5人）
担当課及び連絡先	生涯学習課 生涯学習センター 087-811-6222

会議の経過及び結果

《次第》

- 1 開会
- 2 教育局長あいさつ
- 3 会長あいさつ
- 4 議事
(1) 令和元年度高松市生涯学習センター主催事業（上半期分）について
(2) 令和2年度高松市生涯学習センター主催事業（案）について
※事務局より配布資料に基づき説明後、協議・意見交換
- 5 その他
- 6 閉会

《協議の経過及び結果》

事務局から、議事（1）及び（2）について、説明を行った。

（委員）

生涯学習センターで実施している主催事業を若い職員はどのような意識をもって行っているのか。また、市民のニーズが変わってきているが、組織的に今後どのような生涯学習の形が望ましいか。

（事務局）

生涯学習センターという名称のとおり、世代問わず、すべての人が幅広いジャンルを学習する機会を提供できる環境を整えるという意識をもって実施している。利用していただいている方は、その講座に興味があり、参加されているので、良い意見をいただくことがほとんど

どである。しかし、すべてのジャンルを網羅できていないため、要望をいただくことがある。いただいた御意見を参考にしながら、来年度以降の講座計画を作成したい。

(委員)

生涯学習センターの若い職員と話すと、生涯教育に対する熱い思いを感じる。若い職員同士で意見を出し合うと活性化し、次世代のための生涯教育につながっていくと思う。

(委員)

後半の質問については、上半期を振り返り、下半期・来年度にどのように生かすのかということと合わせて後ほど熟議したい。

(委員)

上半期に参加した講座では、アンケートがなかった。参加していて思ったことがあっても、直接伝えることができなかった。毎回アンケートがあれば、1回目に思ったことなどを記入し、その意見を取り入れ、2回目以降に改善し、質問内容に答えることが可能である。負担になるかもしれないが、毎回アンケートを実施した方が次に生かせるのではないか。

また、高松市民大学にも参加したが、参加者が少ないということが率直な感想だった。教育関係者だけでなく、子育て世代にも関係している講座内容なのに、子育て世代の参加者が見られなかったのが残念だと思うと同時に、講座内容の中に生活にすぐ生かせる項目があれば、参加しやすかったのかもしれないと思った。

最後に、農産物に関する講座に興味があるので、今後も続けてもらいたい。

(事務局)

アンケートについて、現在すべての講座での実施はできておらず、期間を定めて実施しているという現状である。講座担当者が生の意見を聞いたときは、書きとめておき、次に生かすようにしている。御意見のとおり、毎回アンケートができればよいが、すぐに対応は難しいため、多くの意見を取り入れることができるように工夫したい。

次に、高松市民大学について、すべての保育園・幼稚園に周知したが、実施時期が保育園・幼稚園が忙しい時期で参加しにくかった。開催時期や内容について検討したい。

(委員)

議事(1)の資料で、生涯学習カレッジ事業の上半期計画が23講座に対し、実施が22講座となっているのは、講師の体調不良により、1講座実施できなかったという説明だったが、生涯学習推進事業の上半期計画が72講座に対し、実施が64講座しかなく、8講座実施できなかった理由は何か。また、市民参画促進事業・展示事業についても同様に計画と実施に差があるが、その理由は何か。

(事務局)

生涯学習推進事業については、講師の体調不良に加え、上半期に予定されていた講座が下半期へずれたからである。また、講師が講座を実施できなくなり、後任を見つけられなかつ

た講座や、相手方の担当者が異動になったため、継続が難しくなった講座があり、実施講座が減少している。市民参画促進事業・展示事業については、計画が1年間で実施する講座数・展示数となっている。実施は計画通り進んでいる。

(委員)

生涯学習推進事業の講座が中止になるようなことが起こらないように、反省点として、日頃から関係団体との連絡を密にとるなど、これからどのように対策すべきか考えるべきである。

(事務局)

年度当初に早めに連絡をとるなど、対応したい。

(委員)

前向きに取り組まれている中で、将来、市民が積極的に参画できるようにすることが、施設の理想形だと思う。

(委員)

かつては社会教育と言っていたが、その後、様々な呼び方に変わり、最終的には生涯学習と言われるようになった。学習というのは、市民本位である。かつては、高松市が教育しないといけないということだったが、これからはいかに市民に参画してもらえるか。早くこのような状態になれば、理想的である。そのためには、市民のアイデアを受け入れるシステムを用意するなど、対応していかなければならない。

質問だが、来年度の計画(案)で、市長のマニフェストである「老若男女の笑顔が輝く元気な高松の創生」に掲げる施策テーマから選定し、関係する局と相談しながら講座を実施するとある。来年度は「共生のまちづくり」をテーマに開催するが、それ以降はどのようにお考えなのか。

(事務局)

6つの施策テーマから毎年選択し、実施する予定にしている。

(委員)

市役所内の各課や出先機関と連携し、それぞれの持ち味と生涯学習センターのノウハウをお互いに活かせるように取り組まなければならない。

(事務局)

各課・出先機関と連携していかなければならないと思っている。現在の体制としては、生涯学習推進本部会、その下部組織の幹事会があり、それぞれ局長級の職員、課長級の職員が所属している。特に、いきいき高松まなびプラン(高松市生涯学習基本計画)の計画終了に伴い、教育振興基本計画を見直しており、生涯学習推進本部会で議論していくことが役目だと思っており、強化していく必要がある。

(委員)

男女共同参画に関する問題点は、根本的に突き詰めていないので、解決しないまま社会情勢は変わっていくが、市民はそもそも大きな関心を持っていない。行政が分かる言葉で説明責任を果たす必要があるが、いきなり頭ごなしに伝えるのではなく、生涯学習センターで解きほぐして市民に伝えることが役目だと思う。

(事務局)

基本に立ち返り、生涯学習の理念を確認すると、「学ぶ」と「生かす」という2本の柱が基本となっている。先ほど教育振興基本計画を見直していると説明したが、この2本の柱を見据えていきたいと考えている。また、国の教育振興基本計画の中にもあるが、生涯学習で学んでいただくこととして、現代的課題があげられており、当館で講座を実施することで市民の方にも学んでいただければと思っており、その視点がこれから大切になってくる。現代的課題については、市全体に関わっている課題であり、生涯学習の一環であるという共通認識を持ち、生涯学習推進本部会や幹事会で共有していくことで、少しずつ進めていけるのではないかと思う。

(委員)

令和2年度事業計画(案)の中に、市長のマニフェストに掲げる施策テーマから「共生のまちづくり」を選択し、それに関係する講座を実施することになっているが、他の施策テーマにも関連している。年度ごとに1つのテーマを設けることは大切だと思うが、施策テーマをリンクさせていけば、さらに幅広い講座を実施できるのではないか。

また、講座に参加していて、座学だけの講座だと参加しようと思わない。アクティビティや参加者同士で話し合い、学ぶような仕組みを講座内容に取り入れ、人とのつながりができる講座があれば、参加したいと思う。

(委員)

「共生のまちづくり」の中で、更に「コミュニティ、子ども・子育て…」などと項目があげられているが、例えば、「子ども」だけに視点を当てるのではなく、「子どもを核として共に生きていくまちづくり」まで視点を当てて考えないと、テーマに沿った講座ができないと思う。

(委員)

生涯学習の行きつくところは、コミュニティの再生、仲間づくりであり、生涯学習センターがすべきことは、社会貢献ができる道を開くことである。最終的に生涯学習はお互いが助け合い、市民主体で行う共生社会になると思う。

(委員)

共生は抽象的な言葉でとても幅が広い。まとめると、コミュニティをつくるということである。このテーマでは様々な内容を実施することが可能であり、他の事業を組み合わせでできることもある。局で連携し、事業ごとにコンセプトを考え、様々な講座を開講できるよう

に、今のうちから検討していただきたい。

講座はやりっぱなしではなく、評価をしなければならない。評価を積み重ねることで、改善点などが分かる資料となる。新規事業については、まず参加者に細かく聞き取り調査をしなければならないし、担当職員にも意見を聞き取りし、双方の意見を踏まえ、講座の評価や次年度に向けての改善点を含めた案を作り、このような運営協議会の場で質疑応答をすれば、より建設的なやり方になると思う。

事務局から、報告事項について、説明を行った。

(委員)

人気講座は広報しなくても様々な人に伝わる。講座内容について、毎年同じ内容をしているようでは難しい。行政は参加人数を増やすことに焦点を当てがちであるが、良い内容の講座を我慢強く続けるなど質の向上を追求することが大切である。

(事務局)

講座の内容を充実させることは、重要なことだと思う。講座のニーズは多岐にわたり、現在もニーズに応じて講座を行っており、その講座を受講していただくことが必要なことだと思う。受講していただくためには、情報発信や広報活動が大切である。

生涯学習推進本部会で事業の進捗状況を取りまとめた際、人数が増加した理由として、1つは講座内容を変更し、マンネリ化に対応したこと、もう1つはSNSなどを使用し、広報活動を工夫したことが挙げられていた。情報発信は講座を実施する上で、大事な要素である。

先ほど子育て関係の講座に参加者が少なく、残念だったというご意見があったが、生涯学習課では子ども向けの講座や行事を掲載している「きつずの森」というホームページを開設している。そちらのアクセス件数を増やしていけるように努めたい。

(委員)

どうやってニーズを把握するのが課題である。ニーズを把握するためには、アンケートを徹底してとることが必要不可欠である。そして、統計をとることが重要である。できるだけ全数に近い数をとればとるほど、アンケートの意味がある。意見をたくさん吸い上げるとしたら、それだけの覚悟を持っておかなければならない。全数ができないのであれば、数をしばってどのような質問をするのかを考えておかなければならない。今回のアンケートの案は、質問数が多いと感じるので、質問数をもう少し絞るべきだ。

(委員)

アンケート付の講座等に参加するが、アンケートを提出する人は少ない。アンケートの案を見ると、表面はデータとして必要な項目、裏面は参加者の希望を聞く項目でどちらも重要な項目だと思うが、最後の自由記述はほとんどの人が未記入である。

講座終了後に時間をとり、参加者同士が講座に対する意見を交わしながらであれば、自由記述欄に記入する時間はあると思う。アンケートを活用するためには、このような時間を設けた方がよい。また、その時間内に講座のPRをすることで、紙面の広報だけでなく、参加

者の口コミで新たな参加者を獲得できる。それはとても大事なことなので、やってみてはどうか。

(委員)

アンケートの統計処理を行うことで、単なる主観的な感想だけでなく、それぞれの項目のパーセンテージで年度ごとに比較することも可能であり、事務的な業務の自己評価にもなるので、一度考えていただければと思う。

(委員)

アンケートの案の項目はすべてしているのか。アンケートの項目として載せるのであれば、目的を明確にしないといけない。交通手段など、項目数を減らせるところはあると思う。

すべての講座で項目数の多いアンケートを実施するのは、すぐには難しいと思うので、良かった・悪かった・改善点を記入する簡易なアンケートから始めればどうか。簡易なアンケートだとすぐに書いてくれるだろうし、結果もすぐに分かる。

(事務局)

非常に有意義な御意見をいただいた。評価するに当たって、客観的なアンケートの結果を使うということは必要不可欠だと思う。その活用方法については、検討させていただきたい。

(委員)

事業の進め方についても、工夫をしていかないといけないだろう。大学やシンポジウムでも使われているアクティブラーニングを生涯学習に用いると、自分が主体的に参加したという形になる。そういった形が求められてきているのかもしれない。以前は、座学中心の講座になるが、そうではなく、前倒して講座を終了し、参加者の意見を聞くなどのやり取りがあるような形態に変えなければいけないようになっているのかもしれない。

新規講座では、アンケートをしっかりと取り、良い点や悪い点、次年度はどうするのかということの参考の指針にさせていただきたい。さらに、事業の仕方も考えていかなければならない。庁内各課と実施する講座であれば、あらかじめ前倒して講座を終了し、参加者に意見を聞く時間を設けるということを伝えておけば、うまくできるのではないかな。

(委員)

これからは若い世代の時代である。若い世代の人たちが集う場所にしていかないといけない。若い世代の悩み事や高齢者の困りごとなど、お互いに協力すれば共生社会になるのではないかな。生涯学習センターはコミュニティ再生の場になるという面もあると思う。